



# 小笠原秋一 *Shuichi Ogasawara*

詩集『入り日』より

愛について

愛

それは最も崇高な美

たとえ流れ去っても

愛は天の何処かに記録される

これが愛だと掴み取ろうとすれば

それは手のひらをすり抜ける

愛はきらめき

匂うだけ

それでいて愛は

生命せいめいよりも重い

(一九七四・二)



詩集『入り日』

著者／小笠原秋一  
発行所／ブイツーソリューション  
発行元／星雲社  
定価／800円＋税  
ISBN978-4-434-18890-9 C0092

## “愛は最も崇高な美”

日常の風景の中から切り取られた言葉を綴る、心暖まる詩集《入り日》の中から作家が一番大切にしている一作。人は、さまざまな愛を体験する。親子、兄弟、隣人、周囲の人びとによって、どれほど愛され、愛し合っていることか。その概念は多義的で曖昧。詩人は、そうした愛を「最も崇高

な美」だとする。去る愛があっても、それは「天」の何処かに記録されるが、つかみ取ることはむずかしい。「愛はきらめき／匂うだけ」。それでも「生命よりも重い」。この詩に詩的修辭はない。愛を語る言葉が詩そのものなのだ。  
文／佃 堅輔

## P R O F I L E

おがさわらしゅういち●1933年生まれ。'51県立盲学校卒業、同年国家試験を経て鍼師マッサージ師の資格取得、'57療治を遊して加藤徹郎、春日一行、新谷寅三郎、田中六助、宮城まり子等の住まいにも親しく出入りする、'00から'05まで大田区の視力障害者福祉協会の副会長を務める、'05家庭の事情で広島市に転居し現在に至る。'73詩集『あめあがり』出版（9月）、'01東京盲学校宇奈月分校体験者文集『黒部は永久に』編集・出版（11月）、'09エッセイ集『千秋一話』出版（1月）、'14詩集『入り日』出版（4月）、小説『水色の風』出版予定